スノウホワイト

緋月すい

ちょきちょき　ちょきちょき
真っ白な紙を小さく切る。小さく、小さく、小さく。
柔らかな陽光を反射して、冷たいはさみは鋭利にきらめく。
ちょきちょき　ちょきちょき
真っ白い紙を切り刻む乾いた音。
しゃきん
部屋の中に溢れる紙吹雪。部屋の中は白く、白く、白く。
窓から差し込む光が白に照り返されて、部屋の中は明るい。両腕を広げ、白をかき集める。腕の中に溜めたそれらを舞い上げると、ひらひら、ひらひら落ちてきた。
「ほら、雪が降ってきたよ」
傍らに眠る彼女の髪に指を絡ませながら微笑みかけた。真っ白い雪原のただ中に身を横たえる愛しい人。その唇に鮮やかな紅をさしてやる。
「きれいだね」
彼女をもっと綺麗にしてやらなくては。雪を生む作業を再開する。
ちょきちょき　ちょきちょき
「あ、」
手元が狂い、指先に赤い粒が盛り上がった。頭上にかざしてそれをまじまじと眺める。あか、あか、あか。そっと唇を寄せ、軽く横にひく。
あぁ、彼女とおそろいだ。つ、と頬を温かいものが伝った。
両手に四角い雪を掬い取り、彼女の真上からそれを散らした。何度も、何度も、何度も。
愛しい人に真っ白な雪が降り積もる。濡れ羽色の髪の上にも、白皙の肌の上にも、真紅の唇の上にも。
「白雪姫みたいだね」
輪郭を指でなぞり、屈みこんでその唇に自らの唇を重ねる。
冷たい感触、目覚めない姫君。
愛しい人の周りの雪は染まっている。赤く、赤く、赤く。
姫君が目覚めないのは、毒の林檎を与えたのが魔女ではなく、王子様だったから。
贋物の雪で愛しい人を包み込む。
雪が融けると、君は何処かへ行ってしまうかな。
なら、融けない雪で君を飾ろう。
「おやすみ、愛しい人」
彼女の赤の源泉で光る、鋭い銀を引き抜いて。
乾いた雪をつくり続けよう。

キーワード
「はさみ」、「雪がとけると」